

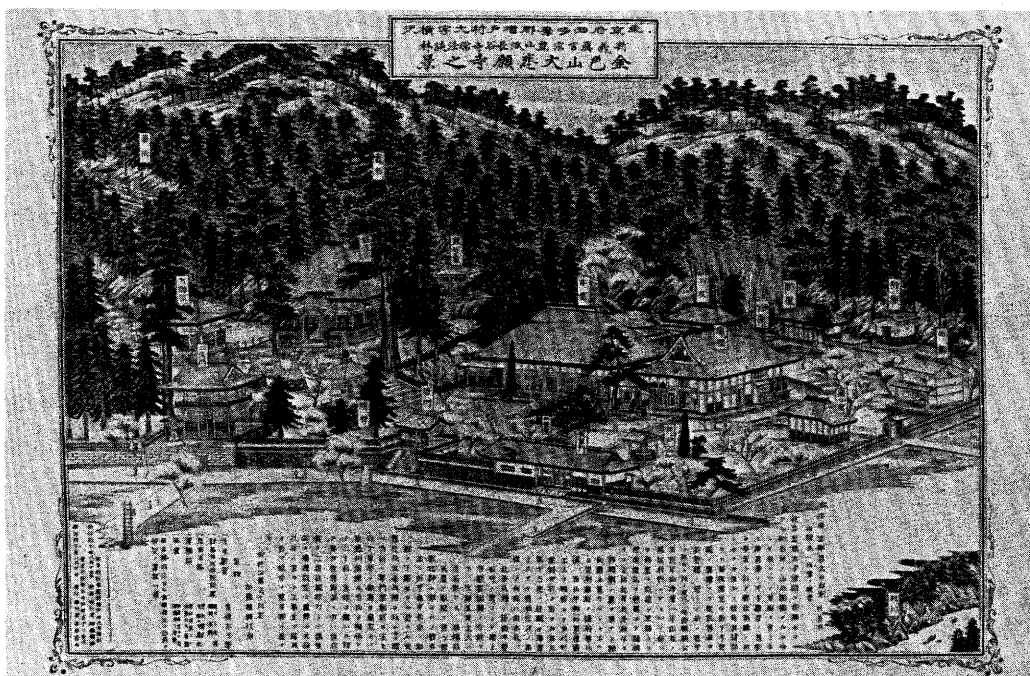
郷土あかし

郷土館だより
第34号

五日市町立

発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069

江戸時代の寺の暮らし (その1) 大悲願寺日記より



この版は明治40年作。寺の状況は江戸期も略々同じ。

てあって面白い。江戸期の地方寺院の内面はもちろん、寺を介して村落の内情、村人の世態人情まで写しとられている。

天明～文化期は階層社会の仕組がいわば完熟した時代で、慈明の批判も縦社会の秩序を乱したり、伝統や先例に反する

はじめに

五日市町横沢（旧横沢村）の金色山吉祥院大悲願寺は真言宗豊山派の有力寺で、開創は1191（建久2年）という古寺である。ここに1785（天明5年）～1817（文化14年）の30余年にわたる日記がある。筆者は、26世慈明、27世宝明という2人の住職で、慈明の入院（着任）記録を含め13冊、770頁に及ぶ。この日記は寺の日常生活の記録で、後日の参考に供するため、金銭出納、贈答品、人事、建物の修繕其の他が記載されている。両者のうち慈明日記の方が記録も綿密で、折々の感想や批判を併記し

ものには厳しい。ふだん合理的判断をみせる聡明さも、その際は影をひそめる。村人も寺内の序列が、村内の序列にかかわるので、戒名一つが個人、一家の問題にとどまらず、村内紛争の種になる。日記の行間から、活字本では得られない生々しさが伝わってくるが、ここではその一部の紹介にとどめる。

たまたま東京都教育庁で、大悲願寺土蔵内の文書、典籍、絵画等の調査を行っており、日記の裏付資料に接することができたのは幸いであった。日記の解説、発表をお認め下さった現住職加藤章雄師並びに、種々ご便宜を与えて下さった調査会の方々のご好意に謝意を表する。

(石井)

1. 就任パレード

天明5年4月、豊山小池坊（大和長谷寺の学問所）で18年間の修業を終え、年41才になった慈明（大久野村出身・もと大悲願寺住僧）は小池坊住職虚明の推挙を得、大悲願寺25世住職鑓津に迎えられ、その後継者となった。

大悲願寺住職になる為には江戸愛宕にある真福寺他3ヶ寺（寺社奉行のお触れを伝達する触頭 寺院）の承認を得なければならない。その時慈明の差出した音物料の明細書が「入院記録」の主要な内容で表紙に「後任住職必携」（意訳）と書かれている。

「1. 500疋（100疋は金1分に相当）

住職御礼（住職任命の礼金）

1. 400疋 同上菓子料

1. 500疋 継目御礼（大悲願寺を継承する礼金）

1. 300疋 同上菓子料

以上院家様（真福寺住職をさす）

以下役者（真福寺の住僧で執事役）、玄関5人、近習2人、勝手役、夫々へ相応の金額記載（省略）

上記の外、他の3ヶ寺へも夫々挨拶料を出し、右4ヶ寺合せて9両2朱と銭3貫文と記され、これは先々師如環、先師鑓津の金額にやや上乘せした額と書き添えてあった。理屈っぽい慈明は「住職御礼」と「継目御礼」とは同じ事、二重取りではないかと批判を書き加えているが、音物料の制度そのものには何の疑念も示していない。慈明もまた大悲願寺住職となれば、32末寺の人事権をもち、今度は継目御礼、同菓子料を受取る立場である。（尤も額は少ないが。）

4月2日大悲願寺へ乗り込む慈明の行列は「先箱2人、徒士3人、籠脇2人、陸尺（籠かき）6人、草履取1人、長柄持1人、後箱2人、合羽籠1人、総勢18人」の大パレードであった。送迎人、見物人のひしめく中、大悲願寺では普段締め切りの中央唐門を開け、新住職を迎えた。

翌日、先住鑓津は小僧1人を共に塔頭 観藏院へ移った。鑓津には隠居料として2人扶持（1人扶持は米1日5升宛、従って月3斗）と小僧半人扶持（月7升5合）他に小遣い銭月2貫248文と観藏院持畑の小作料が鑓津に提供されることになった。

鑓津が慈明を後継者に想定したのは、大悲願寺の修業僧として鑓津に仕えていた頃と思われ、長期の豊山留学も、次期住職としての学問修業であったと思われる。大悲願寺は僧侶養成寺（談林という）でもあるから、住職は学力を問われる。当時の住職の相続は原則として「師

弟相承」で、住職はこれぞと思う弟子を見つけたら、目をかけて育成し、時が来れば後住に指名し、自らの老後はその弟子に委ねる。鑓津は隠居になって16年目寛政12年（1800）に87才で没している。おおらかな人柄で、村人にも敬愛されていたらしいが、慈明の被護も適切であったと思われる。

大悲願寺住職の社会的地位はこのパレードが象徴するように当地では抜んでた権威者の1人である。以後、年始廻り、葬儀等の正式外出は9人位の供揃えを組み、略式のときも挟箱、草履取、籠かき、伴僧等5～6名である。すべての行動が先列によって規制されており、年始廻りは例年正月7日、村々の巡回コースもきまり、立寄先は檀頭（檀家惣代6家固定）と近隣寺院に限られている。一般村人は道端で送迎する習いであった。又葬儀も住職自ら出向く家は檀頭家に限ると古来からきめられていた。一般の葬儀は仁王門から入る葬列を寺で迎えるだけである。

慈明が着任してすぐ目をつけた若い僧侶（慈明と同郷大久野村出身）に義現がいる。後の宝明であるが、義現房のその後の履歴をみると、慈明の特別の配慮が感ぜられる。師によって多くの弟子の中から選ばれ、エリートコースを歩むためには、それなりに身を慎しみ、種々の誘惑にうち勝つ意志の強さが要請されよう。

慈明は華やかな入院パレードの籠の中で、長い修業期を終え、故郷に錦を飾る我が身を思い、万感胸に満ちたことであろう。

2. 豊かな本寺、貧しい末寺

江戸期の本寺末寺制度は幕府の寺院政策の基本である。幕府は広域の寺を宗派ごとに一括して、ピラミッド構造に組織し、触頭を介して掌握した。単独寺院は認めなかった。

当地方には真言宗の大悲願寺、臨済宗の広徳寺、光厳寺という地域本寺があり、夫々20～30の末寺を擁していた。末寺一覧をみればわかるが一口に末寺といっても階層があり、堂々たる御朱印寺（將軍より朱印地という無税地を賜った寺）から、檀家一軒も持たない無住（住職のいない）寺まである。慈明の時代既に無住寺や看守（留守居）のみの寺が多く、正規の住職のいる寺は半数に満たないようであった。ともかく末寺は盆暮れはもとより、所定の年中行事日には本寺出仕の義務があり、その都度何がしかの金品は持参せねばならない。松原の寺では、わらび、独活、きのこ等を以て音物代りとしている。

大悲願寺 末寺一覽

区分	名称	所在地	檀家数	区分	名称	所在地	檀家数	区分	名称	所在地	檀家数
○古末寺	大行寺	秋川市草花	50	門徒	安養寺	五日市町小中野	8~7	又門徒	正音寺	秋川市引田	35
○ "	真照寺	秋川市引田	65~56	"	不動院	五日市町入野	0	"	清鏡寺	八王子市下川口	不明
○ "	円福寺	八王子市川口	12	"	法泉寺	秋川市草花	0	"	福壽寺	八王子市下川口	不明
○新末寺	大光寺	五日市町高尾	21~27 <small>(檀家は法光宛分)</small>	"	東海寺	秋川市上代継	不明	塔頭	観蔵院		0
○ "	大仙寺	八王子市上川口	12	"	観音寺	桧原村大沢	17~16	"	真光院		0
"	成就院	五日市町伊奈	55	"	明珠院	桧原村本宿	0	"	東福院		0
"	真福寺	福生市熊川	22~18	"	長福寺	桧原村中里	16~27	古末寺 3 新末寺 7(うち朱印寺 2) 門徒 15 又門徒 4 塔頭 3 計 32			
"	西蓮寺	五日市町益掘	28	"	東光寺	八王子市壘原	1				
"	宝蔵寺	桧原村大沢	20	"	如意輪寺	八王子市壘原	20~0				
"	正福寺	八王子市上川口	3	"	泉蔵寺	八王子市田守	不明				
門徒	龍性寺	五日市町伊奈	5	"	一重院	八王子市川口	0				
"	法光院	五日市町高尾	0	"	円秀寺	八王子市川口	不明				
"	地藏院	五日市町留原	2~3	又門徒	円能寺	秋川市草花	不明				

註 (1)又門徒は古末寺の末寺 (2)塔頭は大悲願寺境内にあり住職が隠居後の住い
 (3)檀家数は明治初年 (4)○印は朱印寺

一方本寺が末寺に対する助成は窮迫した寺に金を貸す位で、それにも勿論利子(年15%程度)がつく。日記を読むと、大悲願寺は五日市村の内山安兵衛家、鈴木伊兵衛家と寺檀関係はないのに、特別親密な贈答関係があるのに気付く、両家とも有力な金融業者で歴代住職が不時の入用に金を借り、時にその金を末寺に又貸しする為であった。

大悲願寺の正式末寺は元来^{だいごようじ}大行寺、真照寺、円福寺の3ヶ寺で、他は^{もんと}門徒と称した。門徒は寺格が低く、住職は^{しきま}色衣も着られない。檀家も住職も昇格を望んだが1寺につき法謝金30両を本寺に納入する規定があった。天明元年、7つの門徒寺院が末寺への昇格を申請した。(本寺からの勸奨もあった模様。うち2ヶ寺遅れる。)法謝金は10年賦で毎年3両ときめられた。慈明の着任はこの納入期に当り、末寺は四苦八苦の最中であつた。一方本寺はこの金を資堂金(寺が運用する金)として末寺や有力檀家へ貸出した。日記をみると慈明は寺の財産管理に緻密で現実的な才幹を発揮している。「横沢入の田小作料滞る、買却して山林に買換える」。「孫左衛門(横沢村の名主)の山20年季で購入する」等の不動産売買を行い、幾通りもの頼母子講(無尽)に加入し、資産の増殖につとめている。慈明25年の在任中、大悲願寺の資産は明らかに増加している。(別資料) 話は近代に飛ぶが大悲願寺所有の田畑山林がピークに達するのは明治大正期で、明治24、25年の資料によれば寺の収入の90~80%は不動産収入(小作料、立木、桑等の売却代)と貸付金収入(利子)で、檀施(檀家よりの収入)は10%~20%に過ぎない。この

傾向は慈明時代に兆をみせている。

寺の年中行事の有力なものに毎月21日に行う「御影供」(弘法大師の命日で、法要を行う)があり、特に入定日の3月21日には境内の観音堂を公開し、末寺僧全員を呼集して、護摩をたき、大般若経転読を行う。参詣人も多く、小屋掛けの店も出る。「桧原で生け獲った熊の見せ物が出たので見物人が多かった。」という年もあった。観音堂の賽銭はときに7貫文を越えた。実はこの日と11月21日は資堂金利息の徴収日で、末寺にとっては有難くない日でもあった。本末関係は単なる上下関係でなく、師弟関係でもあり、人事権を握られているので、上級末寺に転出を願う僧など、本寺への奉仕に心をこめざるを得ない。

日記には末寺の住職と檀家とのトラブルが、折々記載される。内容は寺の不動産収入山林の売却代等をめぐって、これを管理してきた惣代たちの意向と住職の意向の喰い違いで、ささやかな金額をめぐる紛争の背後に貧弱な末寺の財政事情が窺える。法謝金の財源として檀家の法名を昇格させ、禪定門から信士へ、信士から居士へと進め、その礼金(官金と呼ぶ)を以て支払う例も見られた。これは前述したように村内序列を乱さぬ限り有力な方法であるが、必ずしも多用されていない。やはりいろいろな制約があつたようである。禪定門、禪定尼を見かけなくなるのは明治に入ってからである。

慈明は文化7年、住職を宝明に譲って隠居した。その際、彼は懐中金30両を提供し資堂金に加え、運用を法明に託した。法明と慈明の間に取かわされた隠居料契約は

先代鏝津より更に好条件という。(別資料)。しかし皮肉なことに慈明は翌文化8年入寂(死去)している。思うに彼は生命力の大方を在任中に燃焼しつくしていたのではあるまいか。

後日談になるが、3月21日の正御影供は明治になり、太陽暦の使用に伴い、4月21日になった。その頃から「馬待ち」とも呼ばれ、周辺村々の運送馬、農耕馬が着飾って境内に集った。寺では護摩札と小ザルに入れた大豆(馬の好物)を用意した。「馬待ち」は当地方を代表する賑やかな「お待ち」(祭日)で、大正14年開通の五日市鉄道は悲願寺前駅を設け、4月21日に限り、土塁のようなプラットホームに車を停めた。

3. 村の暮らしに立入る寺

江戸時代の幕府はキリシタン禁令を徹底させる為、寺請制度といって、村人を必ずどこかの寺の旦那(信徒)として登録させることにした。毎年3月村の名主は「宗門人別帳」という全村の檀家名簿を作成、そこに「拙寺旦那に紛れ御座なく候」という証明と印を寺側より貰って領主に提出した。この帳面は当時の戸籍簿であった。娘や息子を嫁や婿に出す家では「人別送り」と称する寺印のある転出証明書を貰い婚家先の寺に登録を頼んだ。親が放蕩息子を勘当する場合、正式には人別帳から削除することになる。当然道中手形も出ないから関所は通れない。時代小説の主人公には向くが、実態は悲惨である。昔の刑法は連座制で重罪人の親族はもとより、名主五人組まで処罰の対象となる。親は周囲の迷惑を考え、連座を断つ為、泣く泣く勘当する場合もあったという。それはとにかく、寺が人別帳の捺印者であることは、檀家を寺に結びつけ、従属させ、寺は檀家の内情一切に通ずることになった。

文化3年春、大悲願寺旦那の上村の組頭伴七は悴勇介の嫁に成就院旦那彦治郎の妹を連出した。兄彦治郎は腹を立て、この結婚に不承知と人別送りの手続きをしない。折から宗門人別帳作成の時期に当り、伴七家では家族の一員に妹の名を書加えたが、成就院から人別送りが出ないので、慈明は捺印を拒否した。寺には檀頭連中が連日のようにつめかけ、慈明並びに成就院に印鑑を押すよう懇願を繰返したが、慈明は逆に伴七を呼びつけ、組頭ともあろう者が自分の不始末で村の人別帳を遅らせてどうする。寺に印を押せと頼むより、滞りのない縁組をする方が先ではないか、田安家(伊奈村領主)より呼出しがあったら伴七殿が費用を持って叱っている。費用の話が

出るところは慈明調であるが、話の筋は通っている。結局名主以下村役人、関係者が江戸と村とを往復し、先ず成就院が捺印、ついで慈明が印を押して一件着落した。

寺が村人の生活に立入る度合いは相当なもので、嫁とり婿とりの際は親なり親戚なりがお目見えに連れてくる。帯解き祝い(七五三)も寺にくる。檀家の消息は寺側につつ抜けで、嫁話があると慈明は進んで祝儀を贈る。あげくに、まだ目見えにこないといささか焦れた記述を残している。伊勢詣にゆく村人がいれば餞別を贈り、村祭りにも酒や祝儀を欠かさず、火事見舞は遠方まで使僧を出すといった調子である。村人も盆暮れのみたま(米)や金、収穫期の初穂、その他折にふれ茄子、胡瓜、白瓜、ささげ、乾柿、茶等手作り品を持ち込む。

村人と寺を結びつける今一つの要因にお札類がある。天明8年9月12日の日記に「盆掘村浦野熊治郎 瘡に付、御符願い来る」とあり、この時は護摩札の他「例の妙薬遣わし候」とあるので、寺は漢方薬も用意しているようである。また三人の女兒が痼病につき、お札を頼みに来た親の記事があり、後日治癒の礼金も記されているので、読み手もホッと胸をなでおろす。

大悲願寺のお札の中で著名なのは安産札で、これは遠方からの依頼者もある。安産札をもらった夫婦がお札をかねて寺に詣で、名付親になってほしいと頼む記事もあった。慈明は喜んで祝儀を包んでいる。

もともと加持祈祷による医療行為はよいことばかりではない。文化5年間6月23日に檀頭家の一軒より「妻、産後狐付に付」お出で願うと頼まれた。これは特別の家でもあり、早速慈明自ら出向いた。日記には「邪気加持仕り候処、神妙に相成り一」とあったが同月29日には死去として葬儀の記録に変っている。

大悲願寺の土蔵には数千点の典籍があるが、その中に毛色の変った「算学啓蒙諺解大成」全7巻があり、所有者に慈明の名が記されている。これは元禄発刊の数学書である。慈明は又時計を作る特技をもち、日時計、ゼンマイ時計等の製作、修繕の記事もある。彼は現代風にいえば理科系の教養、能力の持主である。真言宗僧侶として加持祈祷を行う彼と、2つの面が1人の人格の中に矛盾なく包摂されるものかどうか。こんな危惧の念を抱くわれわれの方が、現代の単細胞的科学信仰に汚染?されているのであろうか。改めて時代の違いを感じさせる。

註 大悲願寺日記は「五日市古文書研究会」で5年の年月をかけ読み終えた。会員清水浩氏は大悲願寺の文化財調査員を兼ね、輪読の際指導役を勤めていただいた。